6.5mmの咆哮

陸攻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
６．５ｍｍの咆哮

【Ｎコード】
Ｎ７４２４Ｑ

【作者名】
陸攻

【あらすじ】
１９４Ｘ年某月南方某島で守備隊は玉砕した。（前略）　だが、その中で俺は何とか生き延びて米軍が迫る中、何とか逃げ回っていた。（後略）……そして、俺は運命の出会いをする？／／／／（

１９４Ｘ年　某日南方某島……

１９４Ｘ年　南方某島……
ここは大戦序盤に米国から帝国軍が奪取した小さな重要拠点であった。
しかし、島の面積が小さければ、さらに要塞化をしようにも工事が滞る程にサンゴの土壌は硬く……

そのために位置的にはかなり重要性が高いのにもかかわらず……防衛をするための準備は全くもって出来ていなかった。

そして、その結果が今から約一週間前、アメリカ軍が上陸し、陣地の構築がままならなかった守備隊は健闘虚しく米軍の前に約一週間で壊滅、その後総攻撃し玉砕した。

しかし、その中にも運よく生き延びた守備隊の残党らがゲリラ戦を展開し、まだ少しながらの抵抗は続けられている模様……

そして、今から始まるこの物語の主人公もこの守備隊の生き残りだ。
さて、これから始まるのは彼らの悲劇的なストーリーではなく……
…一般、普通の常識を一変し、遥かに常識を超えた『幻想』での物

語……

彼は何を見て何を思うのか？

〜　開演　〜

ここは南方にある島。
ちなみに最初に言っておくが俺は南原太一と言う。
さて、今の俺はかなり所が最悪と言える程までに状況が一週間で悪化した……

悪化したと言うにも…この島の守備隊は数日前に最後の突撃を図ったらしく……
認めたくはないが事実上、玉砕した。

まあ、俺みたいな残党は生き延びているから、少数部隊にでもなった奴らがゲリラ戦を展開し、敵に損害を与えているのは確かだが……
敵の掃討作戦を先伸ばしにしていたりもするのはいただけないな……

まあ、説明をしている現時点で…

「突撃！！」

俺らの仲間がまた、どうしようもなくなって突撃しに行った……
つまり、死にに行った……

まぁ……今現在の状況下を簡易的に説明すれば、敵の掃討部隊が周りにいてかなりまずい……

こちらがただの歩兵銃しかないのに関わらず……相手は機関銃やら砲。
そして航空機までも投入できる……

迂闊に戦えば蜂の巣にされて死ぬのは見え見えだ。

俺は、伏せた体を静かに起こす。
そして、俺は愛用の九七式狙撃銃を担ぎ、そっと周りを見て誰も居ないことを確認すると……

「よし……」
と、小さな声を上げてその場からなるべく音を起てずに離れた……
……

が……

パァン……

突然、乾いた音が響くと共に俺はバランスを崩す……

左肩のどこかが熱い……

どうやら左肩を撃たれたらしい……な。

その思わぬ痛みに俺は思わずしゃがみこんでしまう……が、

敵は待ってくれない。

「ちぃ！！」

俺はすぐに痛みを必死に堪え、立ち上がって走り出す。

『もう、こうなれば、しょうがない……』

と言う思いを胸に……

〜〜〜〜〜〜

……あれから何時間かが経っただろう……

俺はたまたま同軍の放棄された洞窟陣地を見つけ、その中で横たわっていた。

とりあえず、撃たれた箇所のの止血はした。

がしかし、血は止まらず……
そのせいで今現在、俺の意識は着々と朦朧してきている。
俺はやっぱりもうダメみたいだ……

そして、何気なく一言つぶやく。
「幻想でも良いから……彼女が欲しかったな……」
この雰囲気がぶち壊しだが『ああ彼女欲しかったな……』
俺の親は病死してもういない。
故郷には幼なじみはいるが、恋人ではない。

俺が、朦朧としていている最中……そんなことを考えているわけであるが。

コツコツコツ……
突然、洞窟の入り口から足音が聞こえて来る……
どうやら誰かが来たみたいだ。
まあ、死にかけの俺には敵味方どちらでも関係ないがな……
敵ならば多分戦えない俺は何もしなければ捕虜になり、味方ならば心配ぐらいはしてくれるだろう。

自決用の何かを置いてってくれるかもしれない。

足音がだんだんと近づいて来る……

そして、間近に足音聞こえ、俺が振り向いた瞬間、俺は固まってしまった…

「お、お前は……誰だ！！」

と、どうでも良いと言った俺が反応してしまうほどに……

「あら、そんなに警戒しなくてもいいんじゃないかしら？」

掴み所がなく、胡散臭くて何だかとても怪しい雰囲気を放つ人物だったからだ。

１９４Ｘ年　某日南方某島……２

……雰囲気がとてつもなく怪しいような人物に遭遇した俺。
金髪だから……敵か？
いや、一応日本語を話しているしな。
しかし、なんだこのなんともいえない違和感は……
今までから考えればありえない。
「すまないな……今、現在意識が朦朧としていてこうなってるんだ……」
今現在はこんな状態だからな。
考えることもままならないからかもしれないが……

俺は何とか体を起こすと、痛みを堪え撃たれた左肩を見せる。
俺の左肩からは少しずつ血が流れ、何故か止まる気配はない……
「あら、しょうがないわね。しょうがないから治してあげるわ……」
「は？」
そして、金髪の女は手を振り上げて、手の平を閉じる。
すると……

「！？」

なんと、あれだけ頑張って止血をしても止まらなかった出血が止まり、なおかつ撃たれた左肩に痛みはなかった。

おい…一体、何が起きた！？

「はい、貴方の中にあった弾はこれよ。」

そして、俺の体内にあったはずの小銃弾が綺麗な状態で目の前に出される。

今、普通に軽く言ってるようだが……

どうやったんだ？

意味が理解できん。

いや、意味がわからん……

てか、どんな距離から撃ったのか知らないが。小銃で撃たれて貫通しなかったのは幸か……

「あ、ありがとう……」

あ、あまりの驚きでなんか突っ掛かって言葉が続かないな……

……どうしようか？

「え～と……良いかしら？」

「あ、はいどうぞ」

いや、実はまだ何も掴めていないのが本心である。

「私は八雲紫。妖怪よ。」

はあ！！？

「妖怪、ですか？」

妖怪って…

確かに非現実的な事が今現在に起きたけどさ。

さすがに……それは「ありえない　かしら？」ははは……有り得ん！！

俺はあくまで妖怪の事は認めない……がな。

「はあ、しょうがないわね……」

俺の強堅な考えに呆れたのか何か……

紫はまた手を挙げると……

パチッと指を鳴らした。

そして、それで起きた現象があまりにも非現実的で……

「……」

俺は何も言えなかった……

うん、これは理解しなきゃあいけないな。

「ああ、わかった……紫が妖怪だと言うことは認める。　が、じゃあなんで俺みたいな奴にわざわざ会いに来たんだ？」

「それは、ただの気まぐれよ。」

「そうですか……」

普通に喋っている俺だが、妖怪だと認めた理由は……

「で、なんで俺は落下してるんだ？」

気持ち悪いような空間に自然落下したからだ。

というよりも何故落とされた？

「それも、「気まぐれですか？」そうよ……」

はあ…

で、俺はどうなる！？

「大丈夫よ、また数年後までには会えるわよ。」

何故、数年後なんだ？

てか、俺は今から何処へ行く？

「で、思ったら。まだ、貴方の名前を聞いてなかったわね……」

はあ、やっとこっちに話の主題が回って来たよ。

「俺は南原太一。玉砕した守備隊のしがない狙撃兵さ……」

すると……

「ププッ……」

なんか、何故か知らないけれど…笑われたよ。

「貴方、やっぱり変わっているわ」

「そうか？」

「そうよ、今まで会った貴方たちの仲間はしがないとかの自虐なんて言わないし、軍の階級も必ず外さないで言う。　でも貴方は自分の事を自虐して、階級も流した……

ホント、変わっているわ……」

「ププッ……」

ああ、この人は本当にそう思ってるのか？

何だか…

無性に自分が悲しくなって来るな。

ちなみに今現在も低速で落下中だ……何故か低速である。

「そろそろ時間ね。　じゃあ、最後にひとつ……」

……

「幻想郷にようこそ、幻想郷はすべてを受け入れるわ。」

その言葉を最後に…俺は、何故かそのまま気を失った。

目覚めの先は……

「はあ？　何故貴女がそんなことをするのかしら？」

「ただの気まぐれよ。」

「・・・・まあ、起こす前につぶされるのはごめんだから逆に感謝するわ。」

「それじゃあ、よろしくね。」

・・・・・・・・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～

「うん・・・・・・・」

俺は、目が覚めて気がつけば門のような場所に寝かされていた。

無論、起きたばかりなので横たわった状態であるが。

しかし、体が重い・・・・・・

動かないわけではないが、目が覚めたばかりのせいか、体が重いに加えてなんだかだるく……

最近まともに体を休ませていなかったからか？

まったく面倒臭い……

しかし、俺がこんな風に物事を考えていると…

「ふう、こんな暑い日には門の前で門番をするのではなくて、日陰で昼寝をするのが一番なんですけどね・・・」

と、かなり面倒臭そうにしている声が聞こえた。

無論、俺のすぐ近くである。

そして、よくよくと周りを見て考えれば……ここは門が作り出している日陰がある場所であり、誰かが俺のことを移動させてくれた可能性が高かった。

愛用の九七式と死に間際だった別の部隊に所属する兵に出会った時に託された三八は、俺のすぐ傍に置いてあり、これを見れば一応捕らえられた訳ではないらしい。

というか、結局まとめて考えればさ、今の発言をした人物はただサボりたいだけじゃねえか…

そう思うと何だか放っておけないのが俺である。

俺は無理やりだるくて重い体に鞭をうって起き上がると、

「番をするならば、せめて区切りをつけて集中しろ」

と、言いながら門番らしき人物の肩を叩いた。

～～～～～～

「咲夜」

「はい、ここに・・・・」

「客人を迎える準備をしなさい。」

「客人・・・ですか？」

「そう、客人よ。」

「・・・・わかりました。」

～～～～～

門番らしき人物と言うのはかなり背が高く、かなり変わった服を着ていた。

これは、何と言えば良いのか……？

「わっ！？」

「お前が俺のことを助けてくれたのか？」

「そ、そうですけど」

いや、でも誰かの声に跳ね上がるくらいに驚くならば、さっきのような失言はやめておいてほしいな。

ここの当主きかれたら何か普通にやめさせられそうなやる気なさげ

な言葉なのは間違いないし。

いや、でもしかし……む「それで、体調の方は？」

いかん、ダメだそれに目を向けてはいけない……

「ああ、良くはないが死にそうな訳でもない。　逆に最近はまったくというほど体を休ませられなかったから感謝する。」

とりあえず、自分の本能に打ち勝った俺は感謝の言葉を述べた。

新たな始まり

「私はこの館の当主であるレミリア・スカーレットよ。」

「自分は……まあ、意味は良く解らないだろうが軍の中では狙撃部隊に居た。名は南原太一。」

随分と場面が飛んでしまっているが……それはあの門の前でいろいろと大変なことがあったからである。

……うん、何かと大変なことが起きたんだ。

「突然だけど……単刀直入に言わせて貰うわ。」

「どうぞ。」

別に、ここではまだ居場所のない俺がどうのこうも言っても何も解らないから言わないだけだ。
まったく、八雲の奴も面倒臭いことをする……命の恩人でもあるから文句は本人の前では口にしたくはないが。

「私は、一週間後に異変を起こす。　だから貴方にも私の計画が成功するように手伝って貰うわ。」

「……異変？」

……何だ、異変と言うものは。
名前を聞いただけではよくはわからんが……良くない事だけはよくわかる。

「まあ、簡単に事件と考えてもらえればそれで良いわ。　だいたい貴方はその為にここに送り込まれた訳。」

送り込まれた……か。

八雲の奴め……俺の中にまた変な戦いを持ち込みやがって。
しかし、事件を起こすと言ってもまったく俺は何にもしらないんだぞ……

「ああ、最大限の協力をさせてもらう。
命の恩人に送り込まれたなら尚更だ。」

「ふふ……　説明は私ではなく、親しい私の友人にしてもらうわ。」

「承知した。」

「それと……その硬い言葉は使わなくて別に良いわよ。
使い慣れてないのがバレバレなのよ……」

「ああ、気遣いありがとう。　その通りにいつも使わないからなれてない。」

まったく、やはり敵わないな……
別に張り合おうとした訳ではないが、俺も少しは悔しいのかもしれないな。

「咲夜」

「ここに。」

「案内をよろしく」

「それでは案内を致しますので」

「分かった。」

俺は、また突然現れた銀髪の使用人に内心で困惑しながらもその背中を追って歩き始めた。

「じゃあ、これからよろしく頼むよ。」

後ろ向きでレミリアに手を振りながら。

〜〜〜〜〜

廊下に出ると改めておもった事であるが……この館、本当に真っ赤である。

壁の色が赤、絨毯の色も赤……

本当に紅魔館と言う名が相応しい館だ。

「咲夜さん。」

「何？」

「やはり、地はそんな感じなんだな。」

「日常でもああだったら気持ち悪いじゃない……」

まあ、確かに……そうだな。

「ああ、悪い。当然なことを言ってしまったな。」

「別にたまに言われるから良いわよ。
それよりも……」

「？」

「短い間だけどよろしく頼むわ。」

「ああ、こちらこそな。」

本当にこちらこそであろう……

八雲の奴にも恩はあるが、とりあえず期限付きでも自分のような奴を雇ってくれたからにはレミリアにも感謝をしてその分の仕事をしなければな。

歩きながら話していている俺は、心の中でこれからの為に死んで逝った仲間に冥福を祈る言葉をかけると……

「雇われたならば、軍で随一と言われた俺の狙撃能力を惜しみ無く使ってやるから……何があっても自分の配置場所は自分で選ばせてもらうぜ。」

この俺を使おうとするならば、覚悟は最新から決めてもらおうか。

「はあ……　分かってるわよ。　そんなに貴方を縛ろうとしてないから……」

どうやら、俺の思い違いだったらしい。

俺はそう言うと咲夜さんのあとに続きながら、ポケットに入れて置いた煙草（敵の偉そうな奴から数箱分捕った）を一本取出し、ライター（これも同様）で火を「館内は禁煙です。」

思わず身体から冷や汗が滲んでくる……

……前言撤回。

やはり煙草を吸うのはやめて咲夜さんの言うことは多少、聞くことにする。

無能な上官を誤射と言う名目で消す俺が何故そうするのか？

そりゃあ……

「わかりましたか？」

と、咲夜さんが笑いながら俺の首にナイフを突き付けてるからさ……

流石に、逆らったら本当に殺られそうだ……な。

「了解、善処するよ。」

俺は詰まりそうになりながらも何とか詰まらずに苦笑を顔に浮かべながらそう、返事を返した。

説明と……（前書き）

誤字を修正しました。

自分は携帯作業なので再投稿させてもらいます。

説明と……

俺が煙草の件で死にかけ、その後咲夜さんの後ろを着いて歩いて約１０分くらいが経った……

んで、この館の中仕組みがどうなっているのかは知らないが、外見から予測できる広さと中の本当の広さが違い過ぎる……

つまり、広すぎるのだ。

「なあ、あとどれくらい歩くんだ？」

「あと、数分間ぐらいだからグズグズ言わない。」

「あいあい…」

しかし、気がついている人は少ないと思うから言うが……俺はまだ身体を休ませてはいない。

あの時は門の傍で気絶していただけであって……普通に俺は休めてないんだ……

だから疲れは一応ピークなのだが……

「何？　何か文句ある？」

……言えない。

せっかく案内してくれてるのに疲れたから歩けないなんて……

「いや、なんでもない。」

結局俺は、そう言って身体に鞭をうちながら後ろに続いて行くのだった……

〜〜〜〜〜〜〜

「まあ、そんなことになったから少しの間よろしく頼む。」

「まあ、レミィの考えは良く分からないけど死なない程度に頑張りなさい。」

あの後に俺は目的地に何とか辿り着くことに成功した。

しかし、その目的地と言うのが……

「しかし、ここは本当に広いな……」

膨大な広さと有り得ない程の数の本を置いてある図書館だったとは……思いもしなかった……

「本は持ち出さないこと。」

「？」

「それなら本を読んでも別に構わないわ。」

……なんだ、そういうことか。
突然言われたから理解出来なかった。
「ありがとう、感謝する。」
俺は、そう言って身体を……
「待って。」
「何だ？」
行こうと思っていたのだが……
「貴方、さっき能力について説明を聞いたわよね？」
「ああ、聞いたな。」
しかし、その他にも人が飛べる事が驚きだったが……
「それで、貴方にも能力がないか調べさせてもらいたいのよ。」
……俺に能力？
まあ、あったらあったで便利さ極まりないんだろうけど。
「分かった。　俺も実は気になっていたからよろしく頼むよ。」
「分かったわ。　準備が必要だから待っててくれない？」

「分かった。　少し寝ていても良いか？」

「良いわよ。」

まあ、このように会話し……俺は少しながらも寝る時間を獲得するのに成功した。

眠い……

そういえば言うのを忘れていたが……

彼女の名はパチュリー・ノーレッジと言うらしい。

〜〜〜〜〜

それで、次に俺が起きた時にはもう……能力検証は終わってしまっていたと言うのは、きっと余談である。

「だって……貴方、いくら揺さぶっても何しても起きないんだもの……」

そして、あまりの熟睡度に呆れられていたのも……

館内散策？

俺はあの後に大図書館を後にし、見た目と比べて何かと大きいこの館の中仕組みなどを覚えるため、パチュリーにもらった地図を頼りに館の中を散策していた。

が、

いや、でも・・・・『本当にこの館の中を詳しく覚えられるのか？』と、思ってしまうほどに複雑であったりとか、部屋の多さが俺の俺の・・・・効率の良いような作業を妨害していた。

・・・まあ、自分で効率の良いとかのことは言ってはいけない気がするが・・・・

それでも事実は変わらずに俺の作業を妨害し続けるのはこの館の内部の異常な広さ。

良く捉えれば、この広大（一般的なものより）な広さを上手く利用できれば狙撃をメインにする俺は特に有利になる。

しかし、逆に捉えれば不安材料にもなるので・・・

決してとてもよい状態だとはいえないのだが・・・

俺は、とある場所の階段へと・・・・・？

「？」

あれ？　俺はちゃんと間違わずに道を進んできたはずだったよな？

そうだよな？

突然、疑問文が出てきたおれだが・・・・その理由は俺が目指していた階段の横にある。
その階段の横に何があるのか？というと、簡単に言えば・・・・・
地図には書いていない道があったのである。
普通ならば、館の中ではこのように目立つ道ならば地図に表記するはずだ。
確かにそのはずだ・・・・・

しかし、今俺が見ているのは・・・・空想でもなく夢でもない・・・・
現実である。

「一体、何がこの先にあるんだ？」

俺は、わからないものに対して・・・恐怖を抱くのでなく、逆に知的好奇心が湧いた。
つまり、俗に言う「冒険」にいきたくなるかんじである。

横にある道の奥は真っ暗である。一応、灯を灯す場所は有る・・・・・・
しかし、奥に行くならばちょっと危険だろうが、それよりもここで働く人に見つかるのは不味いであろう。

特に、咲夜さん。彼女である・・・・・彼女だけにはホントに発見されたくない。

そうすると、俺はライターとあたらしいタバコを一本取り出し、横の地図に表記されていない道へと入っていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

同時刻・・・・

「お嬢様・・・・」

「何、咲夜。」

「・・・・・彼が、もしあの場所へと行ってしまったらどうするのですか？」

「大丈夫よ」

「ですが、最悪の場合「大丈夫よ。」・・・・・・はい。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

俺は、あの後から階段のすぐ横にあった道へと進んでいた。
どうやらここは地下へと続いているらしく、俺はタバコを吸いながらライターの僅かな灯りで進んでいた。

コツ、コツ、コツ・・・・

俺の足音以外は何も聞こえないくらいに周りには静けさが漂っており、表現を変えてみれば何か寂しい感じである。

コツ、コツ、コツ・・・

俺は、前にへと進むが・・・この道は一体何処にへと続いているのか？

地下にへと続いているのだから・・・物置なのだろうか？

・・・・・それとも？

それともなら何なんだ？

今更ながら俺の思考に疑問が恐ろしいスピードで湧き続け・・自問自答し続けることで俺はいっぱいいっぱいになっていた。

・・・・落ち着け。　落ち着け、俺。

何こんなことでパニックに陥っているんだ？

もっと、精神が崩れてどうにかなってしまいそうだったり・・・

隣で撃たれて体の一部を持ってかれた瞬間。

そして・・・・・俺も実際に死にかけたじゃないか。

何とか、これまでのことを思い出して気をもたせた俺だが・・・・・

『やっぱり、疲れているんだろうか？』と思った瞬間でもあった・・・

しかし、こんなことでこれからの戦いに耐えて成功させることはできるのだろうか？

キャラ設定

名前

南原　太一

ナンバラ　タイチ

年齢

２４

～～～

とある南方の島に配属されていた狙撃兵。

（もともとは徴兵されたただの一般人だったが、射撃訓練時に意外な結果を残した為に狙撃部隊に回される。

その後、狙撃の腕が群を抜いていたことに上官から嫌がらせをくらうが……誤射の名目で射殺するという荒業を使うが、その一件で南方に飛ばされた。）

性格的には悪い奴ではないのだが、いろいろと問題を起こすトラブルメーカーでもあったり……

まあ、変わった人物としか言いようがない。

（あまり継続的に嫌がらせをし続けると影から撃たれて暗殺される可能性があるので……　その点は気をつけなければならない。）

～武器

基本的には九七式狙撃銃を用いるが味方の重症兵から托された三八式歩兵銃があれば、敵兵から拝借したＭ１９１１も使う。

まあ……つまり、使えそうな火器があれば何でも使おうとするらしい。

地下……（前書き）

意外に忙しさが増し……執筆の時間が取れない……

地下……

ドアをノックした俺は、新しい煙草を吸いながらこの部屋に住む人物の返事を待っていた。

辺りは前にも言ったように真っ暗であるが、今現在は煙草を吸っているので煙草に気を取られているためにそんなに気にしていない。

ライターオイルも無駄遣いをしたらもったいないしな。

……まあ、ここらには先程確認した所、燃える物ようなはなかったから心配する必要性は感じられないのだが。

「……ふう」

はあ……落ち着く……

戦場にいた時もそうだったが、やはり息抜きは必要だ。

そりゃあ…さ、あんな場所で割り切らずに何時も考えてたら潰れてしまうだろ？

俺はそう思う。

心が病むんだよ……

常に戦闘中は何処かで衛生兵を求める負傷兵や、身体の何処かが無

惨にも跳んで行く場所ではな……

さらに、俺は狙撃手。

心の中に焦りが存在すれば……それが自分の死にへと直行する。

決して帰って来れない直行便だ……

……だから、心を奮い立たせる方法を知らなければいけないし、心を落ち着かせて集中力を最大限に高める方法も知らなければならない。

勿論、それは自分で学ぶことであり、教えてもらえることではない……

カン、カン、カン……

俺は、もう一度部屋にノックをする……

そして、また扉をノックした音だけが周りに響く。

普通の人ならば、音が自分の出した音しか聞こえないところで、さらに真っ暗だと恐怖感を感じて覚えたり、下手すりゃ発狂する人もいるらしいが……

俺は今までの経験と訓練が影響しているのか……まったく恐怖感を覚えたり感じたりしない……

まあ、人間は無力だろうとそんなに精神はか弱くないのさ。

「誰？」

『！？』

……まさかとは思っていたが、本当に中に住んでいたとは…

俺はあまりにも驚いてしまったのか、半分も行っていない煙草を落としてしまった……もったいない。

しかし、人を待たしている時に勿体ながっている暇もない。

さて、俺が持ち掛けた事だ……話してみるか。

「ああ、こんにちは。」

俺は内心では少し焦っていたが……平然を装って返事をそのまま返す。

「……誰？」

……どうやら、中にいるのは声だけで判断すれば少女だ。

しかし、何だか怪しまれているな……

「ああ、初めてだから知らなくて当然だろうな。

俺は、南原太一。

この館にはとある命の恩人の紹介で一時的に雇ってもらっている人間さ。」

「……私が…怖くないの？」

？

「何故、恐がらなければならないんだ？」

何故、恐がらなければならない？

良くは分からないが……何か理由があるのか？

「……私は、ここに閉じ込められているの。」

「……何故だ？」

閉じ込められている？

俺は、単語に反応してしまい……若干口調が強くなる。

「そう、私は自分で自分を抑える事が出来ないから……何でも壊してしまうから……」

しかし……少女は悲しく俺に訴えてきている。

いくら、壊してしまうと言っても……地下に閉じ込め幽閉してしまえば気が狂って…逆に取り返しのつかないことになってしまうだろうが……！！

俺は、詳しい事はまったく分からないが……

この現実を知り、心に激しい怒りが込み上げていることは確かだ……

「……わかった」
なら、
「お前は、寂しいか？」
俺は扉の向こうに居る少女へ問う。
そして、しばらくの時間が経つと……
「うん、寂しい……」
返事が帰ってきた。
「ならば、俺がその孤独感を少しでも癒してやるさ。」
俺はそう言うと何も迷うことなく、扉に手をかけて扉を開け、中へと入って行った……
〜〜〜〜〜
「……」
しかし、俺の予想とは大きく外れ……
その部屋の中……は、何とも言えなかった。
部屋の端には人骨が転がっていたり、何かの残骸が落ちている。

……これは、どうゆう意味を表す？

「こんにちは、お兄さん。　私はフランドール・スカーレット。
フランと呼んで。」

目の前には背中にレミリアとは違った感じだが、羽がある少女がいる。

「なあ、フラン。　フランは俺のことをどう思う？」

「う～ん……　わからないよ。　でも、私の孤独感を癒してくれるんだよね？」

……俺はその時に、この少女が何故幽閉されていたのか理解した。

「まあ、俺はそのつもりだ。」

「じゃあ、私の我が儘も聞いてくれるよね？」

……どうする？
俺の予測が間違ってなければ…間違いなく戦うことになる。

……どうする？
俺は一瞬悩んだ……が、すぐにわかった。

「俺はその為にここへ入って来た……」
んだと……

俺は、愛銃にクリップを差し込んでボルトを閉める……

「じゃあ、何をするんだい？」

と、笑みを浮かべてフランに問いながら……

～～～～～～

「……」
さっきから…お嬢様は何か落ち着きがない状態がつづいています。
一体、どうしたのでしょうか？

……やはり、私の予想が的中したのか？

それとも……

ドッカン！！

その時、屋敷の何処かから爆音が……

「「！？」」

「咲夜……」

「お嬢様。」

「行くわよ！！」

……やはり、私の予想は的中した模様…です。

「承知致しました。」

そして、私はあの場所へと急ぐお嬢様の後を追って行きました……

……

さて、後から館内で煙草を吸ったことは説教しなければ……

幽閉されていた彼女との対峙　（前書き）

風邪が治ったばかりなので短いですが……

幽閉されていた彼女との対峙

俺が、そう彼女へと返事を返した瞬間、近くにあった筈の椅子が吹き飛んだ。

『……一体、突然何が起きた？　』

と、疑問を持った俺だが…

「じゃあ、行くよ～」

彼女は満面の笑みで開始の宣言をしてきた。

当たり前のことだが、どうやら俺に考えさせてもらえる時間は無いらしい。

しょうがないか…やるしかない！！

「なら、俺も手は抜かない！！　許せ！！」

俺は、フランの腕に狙いを定めると……　そのまま引き金を引いた。

バァン！！

拳銃とは一味違って鋭く鮮明な発射音が部屋に響く……

発射音と共に……

「！？」

目の前に居る少女の右腕が跳んで行ったが……

八雲の奴によると、妖怪は身体の一部が吹き飛ばされようが何になろうが大概はすぐに再生するらしい。

……だから、相手の外見が少女であろうが何だろうが手を抜く気はない。

手を抜いた瞬間に人間である俺は死んでしまうのだから……

俺は三八のボルトを起こして引き、押して倒すと今度は腹部に狙いを定めて引き金を引く。

バァン！！

三八から放たれた三八式実包は何に邪魔をされることなくフランの腹部へと着弾し、フランの腹部に穴を空けて血を噴き出させる。

フランの方を見ると、何やら混乱している様子であり、腹部に穴を空けられた影響か前屈みになっていた。

おそらくフランは人間である俺が自分に何をしたのか良く分からなく混乱している状態なのだろう。

妖怪と比べれば人間はあまりに無力であり、脆い存在である。

が、そのような人間も道具（武器）を使えば勝ちうることも可能になってくるのがまたまたわからないところが俺たち人間の唯一の番狂わせなのだろう。

しかし、この距離で二発喰らって倒れないとは……

やはり『化け物』だ。

俺は非情な行動であるが、もう一度同じボルトを動かす動作を行い、おそらく今回のとどめの一撃になるだろうと予測している頭部に狙いを定める。

そして、俺は「悪いが、ちょっと寝て頭を冷やせ。」

三八の引き金を引いた。

そして、三八の引き金を引いた俺はその結果を見ずにフランに背を向けた。

その理由はフランの頭部を確実に撃ち抜いたことを確信したわけではなく、単に自分が見たくないからである。

自分が三八から放った銃弾が外れればほぼ自分が対抗できる術は持ち合わせている訳ではないし、それで敗れるのならば道具に頼っている自分がいたわけだからなだけだ。

しかし、もしフランの頭部に銃弾が命中したならばどうなるのか皆

さんは想像がつくだろうか？

……まず、一番最初に俺はフランの右腕に狙いを定めて撃ち抜いた。

そして、その結果どうなったか？

……結果、右腕は吹き飛んだ。
無論、軍用小銃の実包を食らったのであるから当然といえば当然なのだろうが……流石に俺は人を撃つ事に慣れてはいない。

つまり、軍人としては心に甘さが残っているといえるのであろうが、自分の心がかなり痛むのである。

……その次に俺はフランの腹部に狙いを定めた。
これは彼女の瞬発的な反撃を懸念したからであり、一発目の右腕の時とは訳が違ってかなり違う意味で重要な意味があった。（右腕は俺の持つ三八の破壊力を見せつける為だった為。）

そして、先ほど放った三発目の意味は通常ならばその人物を本気で殺しにいくときに撃ち込む場所である。

しかし、彼女は妖怪であるために体は再生し、死にはしないと思われるのだが……
情けはかけないとしても何にしてもこれはやりすぎたか？

ドサ…………

この間数秒間生死をかけた賭けをしていた俺であったが、どうやら今回は俺に勝算があったようである。

流石に頭が飛べば再生に時間がかなりかかり、再生した頃にはもう一度俺に撃ち抜かれるのがオチであろう。

俺は「さて、これからどうすればいいんだろうか？」と、俺と幽閉されていた少女しかいない部屋の中、薄暗く鮮明には見えない天井を見上げながらあきれたようになげかけた。

～～～～～～～～～～～～～～

その頃の館の某所……

「お嬢様、何故お急ぎにならないんですか？」

「大丈夫よ咲夜、そう焦ってはいけないわ」

何を焦っていけないのだろうか？

まだ、お嬢様と私は地下通路に入ったばかりであり、もし……太一と妹様出会っているのならば即急に助けに行かなければならない。

それだけ妹様はすさまじい力を持っているのだから……

「ほら、大丈夫よ。」

バァン！！

「！？」

お嬢様が大丈夫だといってすぐに謎の甲高い音が……

本当に大丈夫なのだろうか？

私の手のひらに汗が滲み始める…

「あれは、彼がもつ私たちには無いような物なのよ。」

私たちには無くて、彼にあるもの？

分かりはしないが、とにかくお嬢様が言うには大丈夫らしい……

バァン！！

そして、また一回あの甲高いような音が通路にこだまする……

「咲夜」

「なんでしょうか？」

「次にあの音が響いたら部屋にすぐ入ってちょうだい。」

一体、何故なのだろう？

お嬢様は大丈夫だと言った筈だ……

なら、な「面白いものが見れるわよ」

とりあえず、今更何を考えても無駄なことが分かってしまったので……もう私は何も考えないことにした……

バァン！！

そして、三回目の音が鳴り響いた途端に私は能力を使って時を止め、お嬢様を抱きかかえて移動し……

妹様がいる部屋の中へ入って時を動かす……

すると、何があったというのか……

その部屋の中では……

無残に右腕と頭を飛ばされて横たわる妹様と……

「さて、これからどうすればいいんだろうか？」

と、独り言をタバコを吸いながらつぶやく男が居た。

「ふふ、流石じゃない……　伊達じゃないわね。」

この部屋の現状をよく理解できなく固まっている私に対して、横に居るお嬢様は平然とそう男に対して言う。

すると、男がこちらを向きこういった。

「いや、単に俺は初体験に対する恐怖を味あわせてやっただけさ……」

そして、付けあわしにか手に持っている長い何かをさすりながら。

「決して俺が、強いんじゃない……　ただ、こいつが…いや、こいつらが俺を死の境界線から救い出してくれるのさ……」

男はもうひとつ同じようなものを取り出してそういった。

こちらを向いたときのその男の表情は、笑みを浮かべていたが、その表情を読み取ろうとすれば、反面どこか悲しいような表情であった……

……朝

あのあと、俺は咲夜さんに館内で煙草を吸っていた事がバレてこってりと搾られていた。

そして、その後は対して何もなく、というのは…フランが回復するまでに一晩中くらいの時間がかかるらしく…まあ、なんだかんだな感じになったと言えば良いのか？

まあ、とりあえずそこんところは後から説明するから今回はこんな感じで終わってくれるとありがたい。

ところで俺は今、朝の起床時に爆睡してしまい、身体のあちこちが寝違えて痛みをうったえる事態に陥っていた。

「いててて……」

情けないかも知れないが……

久しぶりに安全が確保されている場所で寝たので、安心しきっていたのだろう。

しかし、まさにこれこそ『自業自得』。

「あら、起きてたの？」

しかし、扉が開く音がしたかしないかは知らないが、例のめいど長が「めいどは片仮名でメイドと書くのよ……」

「わざわざ訂正をありがとう……」

まあ、とりあえず居たのである。

彼女の能力を自分は把握していないが、かなり万能であって戦闘でも使えるのは違いない。

『実際俺も首筋にナイフを当てられたしな……』

「で、ひとつ聞きたい事があったんだけれど…」

「どうぞ。」

否、聞かないで拒否するような事は俺はしない。

いや、出来ない……

「パチュリー様から聞いたんだけれど……　貴方に能力があったそうじゃない。　その能力は一体なんなの？」

情報収集が早いな……

自分はあと数日間くらいは持つとは思ってたんだが。

「ああ、能力があったはあったが、戦闘では決して使えない能力だな……」

俺が、何故使えないと言い切れるのか。

それは……

「俺の能力は『やり取りをする程度の能力』だ。　」

「やり取り？」

と、彼女は首を傾げる。

まあ、『やり取り』の言葉で想像出来る程度は決まっているし、何に使えるかなんて『無線の代わりに出来る』程度なのだが、狙撃をする面や、指揮をとる場面では良く使える。

しかし、幻想郷で無線を知っている人はいるのだろうか？

「ああ、俺がいつ何処に居てもやり取りをしようと思えばその対象とコミュニケーションが取れるんだ。」

「ああ、コミュニケーションのやり取りだったのね……」

まあ、コミュニケーションは能力のほんの一例かもしれない………が。

「まあ、異変の時はかなり役に立ちそうだ。」

「何処ででもやり取りが出来れば即急に対策を実行出来る。だからかしら？」

「………ご名答、流石ここの当主だ。」

「お嬢様！？」

「なに、咲夜……　私はたまには起きて悪いのかしら？」

「いえ、そういう訳ではないのですが。」

まあ、レミリアが起きてきたのは吸血鬼だからか？
まあ、ここに来たばかりのにわかな俺にはわかりはしないが。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

そして、この後は朝食を食べた。

見事に妹のフランを除いて勢揃いだったから別に俺は口を突っ込む必要はなさそうなのだが。

館外散策（前書き）

少し修正をしてみました。

館外散策

なあ、聞いてくれよ。
突然の話で悪いのだが……
俺が昨日今日の食事で分かった事なのだが、どうやら和食ではなく洋食なのがこの館らしい。

まあ、館の造りが欧風だから当たり前の話なんだろうけどさ。

そして、館内は全館禁煙である。

これは死にたくなければ絶対に破る可からず……

～～～～～～

そして、まあ現在朝食を終えた俺は館内ではなく今日は館外（門の外側）の方を見て回る事にしていた。

無論、妖怪が出るかもしれないのでＭ１９１１は持ち歩いているが。
（残りの弾数残数１４発）

「おお、今日は暑いな」

「全く同感です。」

「でも、美鈴は妖怪だから倒れても死なないから心配は無用だな。」
「……はあ」
そこで何故、そこで溜め息をつくんだ？

「私の事を名前で読んでくれるのは太一さんだけなんですけどね……」

「なら、何故溜め息をつくんだ？　俺が変な事を言ったとは思えないんだが。」

逆に俺は良いことをしてたんじゃないか。
あれ、何か違うな……

「いや、『無理しようとするのは、ほどほどにしておけよ』とかみたいな言葉で気を使ってくれるかな～って私は思ってたんで」

……ああ、そういうことだったのか。

美鈴の言ったことが理解出来た俺はポンと手を叩くと……

「そういうことだったのか。」
と、言った。

が……

「残念、俺は悪いが地獄（戦場）を見てきた人間だ。
そんな、そのようなくらいで……な。
さらに喰らっても死なない美鈴にそんな言葉はかけないさ。
だから別に心配も俺はしない。
……いや、精神面は別だけどさ……」

厳しいかもしれない？……がこれが俺である。

「……分かったか？」

「はいはい、今日は咲夜さんに見つからないようにしますからご心ぱ「（ニコッ）」咲夜さん！？」

おお……

どうやら、美鈴は咲夜さんが詰んだらしいな……

まあ、朝っぱらから生々しい映像を見たくない俺は、美鈴と咲夜さんに「ちょっと外回りをしてくる。」

と、言い残すと……門の外へ出て行った。

～～～～

さて、場所を移して今度は紅魔館のすぐ傍にある湖にへと俺は居た。

「うん、水が透きとおっているな。綺麗な水だ。」

その湖の水は見事に透きとおっていて綺麗であり、さらにその影響か周りはかなり涼しげである。

つまり、快適性がとても良いのだ。

俺が南方の某島でジメジメとしていて、蒸し暑さ満天な所から解放された事をまた実感した一面でもあり、何となく昼寝をしたくなる気分でもある。

「まあ、何か変な事があったらすぐに起きれそうだから……とりあえず寝るか。」

俺は早速、自重することなく自らの欲求に負け……

「さて、寝るか……」ちょうど良さそうな木陰を見つけると、そこに横になり昼寝を始めた。

「痛い……」

その頃、ナイフが頭に刺さった門番が門の前に倒れていたらしい……が、

俺には関係ない話……だ。

まあ、そうなんだけど。

湖のほとり…（前書き）

湖のほとり…

俺が湖で昼寝をしてから約数時間。

俺は幸いなのか、昼寝をしても何も何にも引っ掛からずに、

「えへへ…／／／」

いや、ひとつ撤回する。

俺は青い洋服を着た少女に懐かれた……

現在は背中に抱き着かれ、べったりと離れてくれなさそうな状態である。

……まあ、何故か知らないがかなり涼しいので何も俺は言わないが。

〜〜〜〜〜〜

「それで、チルノが言う大ちゃんというのは今日は居ないのか？」

「いや、いつもなら居るんだけど……
大ちゃ～ん　！！」
俺はあのあとから話成り行きでチルノに聞いただけで、決して大ちゃんという人物？を呼んで欲しいとは言っていないのだが……

俺はチルノが出した声の影響をもろにくらい、ジンジンする左耳を片手で抑える。

いきなり大声を出すなよ。

「何？　チルノちゃん？
……って！？
チルノ…ちゃん！！何やってるの！？」

まるで、疾風？の如く現れたのは緑髪の少女。

どうやら、反応を見た限りではチルノとは違ってしっかりとしているらしい……な。

「大丈夫だ。　別にチルノは軽いし涼しいしだから、一石二鳥じゃなくて……」

しかし、そう俺の口が滑ったのがいけなかった……

「へぇ～……」

「……は！？」
また、また突然で悪い…
突然だが、大ちゃんと呼ばれる彼女が俺の目の前に現れて顔面に対して蹴りを入れて来やがった！！

こうやって暢気にも説明をしている俺だが……

バシュ！！

回避仕切れなくて蹴りが少し、頬に掠ってしまった。

ポタポタ……

血が出てる……な。

「え！？」

どうやらチルノは対応しきれてないようだが。

「……どうゆうつもりだ？」
一体、大ちゃんと呼ばれる彼女は何を思って何故俺に対して攻撃をしてくるのか？

大ちゃんを良く見てみれば、その目に光りはなく……逆に光りを吸い込んでいるのではないか？

と、思うような瞳をしていて……不気味さを漂わせるような笑みも同時に浮かべている。

これでは、その状態から非常に恐怖感を覚える人が多そうな感じが俺は気が気にしてならない。

無論、俺は平気だが。

「なんでチルノちゃんが貴方にくっついているんですか？」

「だから、成り行きでこうなっただけなん…　って！？　人の話を最後まで聞け！！」

俺が説明をしている途中にも攻撃をしてくる彼女……俺は何かしたか？

「！？」

してな……ってヤバい！！

気がつけば目の前で右の拳が唸りを上げてそうな勢いで振り上がってやがる！？

これは回避出来ないと思い、流石に諦めて目をつむった瞬間…

「大ちゃん、やめて！！」

チルノの叫び声と共に物凄く殺気が込められていた目の前の拳が下がった……

「いくらなんでもやり過ぎよ！！」

「いや、チルノちゃんがあまりに楽しそうだったから、洗脳でもされちゃったのかな～って思ったのに……」

……洗脳？

何故？

てか、なんでそのようなことをしなければならないんだ？

「アタイだってそんな時もあるよ」

「へぇ～……」

……ダメだ、話をまったく聞こうとしない、こいつは。

～～～～～～～～

「あれ？　何だか血が付いてますけど……もしかして何かありました？」

「悪いが、たいしたことはないから聞かないでくれ……」

そう言って俺は門番をスルーすると、とりあえず顔に付いた自分の

血を拭くために屋敷の中へ向かって行った。

「悪いが、たいしたことはないから聞かないでくれ……」

そう言って俺は門番をスルーすると、とりあえず顔に付いた自分の血を拭くために屋敷の中へ向かって行った。

日本晴れ（前書き）

久しぶりに取り掛かったので、とても短いです。

しかし、次は長さがこれの二・三倍くらいになるでしょう？

日本晴れ

その後、館内に入った俺はすぐさまに手洗い場にへと行き、顔に付いた血や汚れなどを落とした。
そして、ふと煙草を部屋に置き忘れていたことに気が付くと、部屋にへと歩みを進める。

「……」

今更なことだが、それにしても……この館真っ赤で深紅である。

言葉の使い方がおかしいかもしれないが、それだけこの館の全体的な色が赤なだけであって、俺の反応もそんなにおかしくはないと思うんだよ。

さらに中を歩いてると、この館は見た目よりも内部が大きい感じがするんだよな。

まとまりのない話だと思うが、まあ、それは仕方のないことと思って欲しい。

他愛のないことを言っている俺だが、俺は異変が起きる前までにこの館の中と周辺の地形や造りを詳しく知り、把握しなければならな

い。

何故かと言えば、それが今回俺に任された仕事を遂行するために最低限必要となることであるから……

助けられたこの命。

命の恩人とこの館の当主のためにも、自ら命を投げうるつもりで通し抜く。

…この館には意外に死角が多い。

それを上手く活用して妖精を配置すれば……言い方はとても良くはないが、良い感じに時間稼ぎをしてくれるだろう。

決して、捨て駒などではない。

最大限に時間を稼ぐ方法を見つけてみせる。

そして、俺は館から外へ出る扉を開けると、青く透き通るような空を見上げた。

まさしく日本晴れという言葉がふさわしい状況であろう。

しかし、雲もなにも一つないというのは……
結果的には、流石に暑くてたまらないのだが……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7424q/

6.5mmの咆哮

2011年10月9日15時58分発行